

ヨハネの福音書の解説

新約聖書はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4つの福音書から始まる。それぞれの福音書は、異なる視点からイエスの生涯と教えを記している。マタイ、マルコ、ルカには多くの共通点があり、「共観福音書」と呼ばれている（シノプティックとはギリシャ語で「一緒に見る」「共通の見解を持つ」という意味）。しかし、ヨハネによる福音書はまったく異なる。他の福音書にはないイエスの出来事や教えが数多く記録されている。

著者と時代

ほとんどの学者は、イエスの弟子の一人であるヨハネが『ヨハネの福音書』を書いたと考えている。ヨハネとその兄弟のヤコブは漁師だった。彼らの父はゼベダイ、母はサロメ。彼女はガリラヤでイエスに仕え、イエスが十字架に架けられた時に立ち会った。ヨハネはイエスのいとこであった（十二弟子のうち少なくとも5人、おそらく7人はイエスの親戚であった）。

ヨハネは、イエスの宣教の初めにイエスに従うように召されるまで、バプテスマのヨハネの弟子であったかもしれない。その後、漁のパートナーであったヨハネ、ヤコブ、ペテロは、イエスの弟子として召された（ルカ 5:1-11）。

ヨハネはイエスの内輪の3人（ペテロ、ヤコブ、ヨハネ）の一員だった。しかし、ヨハネは間違いなくイエスの最も親しい友人であった。ヨハネが自分のことを、「イエスが愛された弟子」と呼んでいるのを見ると分かる（13:23, 20:2, 21:7 21:20）。この福音書の著者は、自分が記述した出来事を目撃者であると主張した（1:14, 19:35, 21:24-25）。ヨハネはイエスと親密な関係にあったため、主の生涯と教えについて独自の視点を持つことができた。

イエスはヨハネとその兄弟ヤコブを「雷の子」とあだ名付けた（マルコ 3:17）。その後、ヨハネはエルサレムの教会の柱となった。伝承によれば、後にヨハネはエペソに行った。やがてローマ帝国はヨハネをパトモス島に追放した（黙示録 1:9）。ヨハネは生き残った最後の使徒であった。

伝統によると、ヨハネはこの福音書を西暦 80 年から 100 年の間にエペソから書いたと言われている。

目的と特徴

ヨハネは、人々がイエスを信じるように、イエスが誰であるかを理解してほしいと思った。ヨハネは、イエスが神の子キリストであることを証しするために書いた。ヨハネは、イエスを信じるなら永遠の命があると断言した。

ヨハネが福音書を書いた理由のひとつは、ドケティズム（ギリシャ語で「そのように思われる」という意味の「ドケオ」が語源）に反対するためであったと思われる。ドケティズムとは、イエスが人間であるように見えるだけで、実際は人間ではないと主張する誤った教えである。ヨハネの福音書の一つの中心は、イエスは完全に神であり、完全に人間であったということである。

ヨハネは福音書の中で、イエスが神の子メシアであることを証明するために、7つのしるしを含んでいることが指摘されている（以下参照）。

水をぶどう酒に変える	ヨハネ 2:1-12
王室の役人の息子を癒す	ヨハネ 4:46-54
ベテスダでの男を癒す	ヨハネ 5:1-11
5千人を食べさせる奇跡	ヨハネ 6:1-15
水の上を歩く	ヨハネ 6:16-21
生まれつき盲目な人を癒す	ヨハネ 9:1-12
ラザロの復活	ヨハネ 11章

ヨハネはユダヤ人と異邦人の両方に向けて書いていた。ヨハネが異邦人を念頭に置いていたことは、彼がしばしばユダヤの言葉や習慣を読者に説明していることからわかる（ヨハネ 1:38, 41-42; 5:2; 9:7; 19:13, 17; 20:16）。例えば、ヨハネは1章38節で、「ラビ」という言葉が「先生」を意味すると教えている。明らかにユダヤ人の読者はすでにこのことを知っていたはずだ。ヨハネはこれをユダヤ人以外の読者のために説明したのである。

ヨハネは、イエスが旧約聖書の預言を成就されただけでなく、旧約聖書の型も成就されたことを示すことによって、ユダヤ人読者にアピールしたのである。例えば、ヨハネによる福音書1章では、イエスは神の子羊（ヨハネ 1:29）と呼ばれ、天と地をつなぐはしご（ヨハネ 1:51 と創世記 28 章参照）、掲げられた蛇であった（ヨハネ 3:14）。ヨハネは、イエスは天から降ってきた神のパンである（ヨハネ 6:35）と主張し、ユダヤの人々に、モーセが彼らをエジプトから導き出した後、荒野で神が奇跡的にマナを供給したことを思い起こさせた。

最初の3つの福音書（マタイ、マルコ、ルカ）は、キリストの生涯における出来事の描写に焦点を当てている。ヨハネはそれらの出来事の意味を強調した。例えば、四福音書すべてが五千人を食べさせる奇跡を記録しているが、ヨハネだけがその奇跡の後に起こった「いのちのパン」に関するイエスの教えを記録している。

ヨハネの福音書は、神殿の祭りの間、エルサレムとその周辺でのイエスの宣教にほぼ全面的に集中している。マタイ、マルコ、ルカは、イスラエルの北部、ガリラヤ周辺でのイエスの宣教に焦点を当てている。

共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）はイエスの人間の系図から始まる。ヨハネの福音書は、イエスの神性と永遠の存在を宣言するプロローグから始まる。他の福音書はイエスが何をし、何を言われたかを述べている。ヨハネはイエスが誰であったかを説明している。

ヨハネは、キリストの誕生については説明しておらず、洗礼についても触れていない。主の晩餐の儀式についても触れられていない。キリストの誕生、誘惑、変容、昇天の記録もない。ヨハネの福音書にはたとえ話もない。

ヨハネは、イエスが人々と交わした個人的な出会いや個人的な会話にもっと注意を向けている。例えば、ヨハネによる福音書1章では、ナタナエルがどのようにしてイエスと出会い、イエスを信じるようになったかが書かれている。イエスとニコデモ、井戸のサマリアの女性との会話はよく知られている。ヨハネはまた、イエスが以下の人々と交わした会話も記録している：盲人として生まれた人、マリアとマルタ、11使徒、マグダラのマリア、ガリラヤ湖でのペテロ。

また、カナの結婚式、イエスがニコデモと交わした会話、井戸端のサマリアの女と交わした会話など、ヨハネ福音書だけに登場するイエスに関する情報も豊富にある。ラザロをよみがえらせた話、弟子たちの足を洗った話、ヨハネによる福音書13~17章の別れの教えは、ヨハネにしか記録されていない。また、ヨハネは他の福音書にはない聖霊についての教えも含んでいる。**ヨハネの福音書の90%以上は、他の福音書にはない。**

プロローグ キリストの存在と受肉	1:1-18 節
イエスのユダヤとサマリアにおける初期の宣教	2 章と 3 章
最初の奇跡、水をぶどう酒に変える	2:1-11
ニコデモとの対話	3:1-21
サマリヤの女との出会い	4:5-42
足の不自由な人のいやし	5:1-15
盲人のいやし	9:1-41
いのちのパンの教え	6:22-71
生ける水であると主張されたこと	7:37-38
姦淫の女との出会い	8:1-12
神の名を自分のものとされた	8:24
良い羊飼いと主張された	10:1-39
ラザロの復活	11:1-46
弟子たちの足の洗い	13:1-15
上段の間における弟子たちへの個人的な教え	13-16 章
イエスの大祭司の祈り	17 章
奇跡の大漁	21:1-6
ペテロの再任と殉教の予言	21:15-19

公のミニストリー、私的な教え、イエスの受難、ペテロの再任

ヨハネの福音書の最初の12章は、イエスの公のミニストリーを描いている。上で説明したように、イエスはご自身に関する多くの主張をされた。これらの章には、イエスの主張を否定するユダヤ教の指導者たちとのいくつかの対立や衝突が記録されている。ヨハネは福音書の中で、2章の水をぶどう酒に変えることから始まる7つのしるしを示し、イエスがご自分の主張する方であることを証明した。

13-17章には、イエスが弟子たちと交わした私的な会話が記録されている。これらの会話と教えは、イエスが十字架につけられる直前に行われた。この間、イエスは弟子たちに、イエスが彼らを愛されたように、互いに愛し合うように命じられた。これは、私たちが本当にイエスの弟子であることのしるしだ。イエスはまた、すべての信者がイエスの臨在によってひとつになるよう祈られた。

18-20章は、イエスが逮捕され、裁判にかけられ、十字架にかけられ、復活するまでのヨハネの記録である。21章は、イエスがガリラヤ湖で弟子たちと出会い、ペテロと交わした会話についての素晴らしい記述である。イエスはペテロに三度問われた。イエスはペテロに三度、「わたしの羊を養いなさい」と言われた。こうしてイエスはペテロとご自身との関係を回復されたのである。

ヨハネの福音書の概要

- I. イエスの公の務め 1-12 章
- II. 弟子たちへのイエスの私的な教え 13-17 章
- III. イエスの逮捕、十字架刑、復活 18-20 章
- IV. ペテロの再任と回復 21 章

メッセージと特徴

ヨハネは他の福音書よりもキリスト教の教理を表している。ヨハネの福音書には、多くの考え方やテーマが何度も登場する。ヨハネの福音書には5つの主要なテーマがある：

イエスは神であり、「わたしはある」。

イエスを信じれば救われる。

イエスは私たちに、互いに愛し合い、仕え合うように命じられた。

イエスは父との関係を通してすべてをなさった。

イエスは私たちにいのちを与えるために来られた。

ヨハネは、イエスが神であると同時に人であることを強調した。これは最初の節から明らかだ：「ことばは神とともにあり、ことばは神であった。」ことば（イエス）は神であり、常に存在していた。しかし、イエスは人間の肉体を取り、人間となられた。ヨハネ 1:18 にあるように、イエスは神が誰であるかを私たちに明らかにされた：

イエスは神であり、「わたしはある」

ヨハネは、イエスが神であると断言した多くの主張と発言を記録している。例えば、イエスは言われた、「わたしを見た者はだれでも、父を見たのです」（ヨハネ 14:9）。そして、「わたしと父とは一つです」（ヨハネ 10:30）。

イエスは、人々にとって非常に受け入れがたい発言をされた。例えば、ヨハネによる福音書 6章 53-55節で、イエスは、もしあなたがたがイエスの肉を食べ、イエスの血を飲まなければ、あなたがたのうちに命はない、と言われた：

「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに命はない。54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、だれでも永遠の命を持つ。55 わたしの肉は本当の食べ物であり、わたしの血は本当の飲み物だからである。」

これは人々にとって受け入れがたいことであり、イエスのこの言葉を聞いた後、多くの人々がイエスに従うのをやめたのです。

ヨハネは7つのイエスの「わたしは」と言う発言を記録している。

いのちのパン・イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。ヨハネ 6:35

世の光・イエスは再び人々に語られた。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」ヨハネ 8:12

羊の門・わたしは門です。だれでも、わたしを通して入るなら救われます。また出たり入ったりして、牧草を見つけてます。盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかなりません。わたしに来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。ヨハネ 10:9-10

良い羊飼い・わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。ヨハネ 10:11

よみがえり・イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」ヨハネ 11:25-26

道であり、真理であり、いのちなのです・イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。ヨハネ 14:6

ぶどうの木・わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。ヨハ 15:5

いのちはイエスの中にある。イエスこそが私たちの救いであり、命なのだ。これが聖書全体の鼓動であり、イエスご自身が教えられたことのものである。イエスは、御自身が私たちの糧であり、命の源であると教えられた。

旧約聖書のギリシャ語訳にある「I AM」「わたしはある」は、ヘブライ語聖書における神の契約名である。この名前は出エジプト記 3:24 でモーセに啓示された。イエスは、モーセに「わたしはある」と言われた方と同一であると主張された。

イエスは、人々が父を敬うように、イエスを敬うべきだと明確に言われた。「それは、すべての人が、父を敬うのと同じように、子を敬うようになるためです。子を敬わない者は、子を遣わされた父も敬いません。」(ヨハネ 5:23)。ユダヤのリーダーたちはイエスがこのように言い、自分が神だと宣言したのでイエスを石打ちにしようとした。ヨハネの 8 : 5 3、イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。」

イエスを信じれば救われる！

「信じる」という言葉は、ヨハネの福音書の中で 98 回も使われている。上記のように、ヨハネは人々がイエスを信じ、イエスの名によって命を受けるようにと書いた。このメッセージは、ヨハネの福音書の第 1 章から明らかである：

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。ヨハネ 1:12

ヨハネの福音書のメッセージは単純明快である：救いは神の賜物であり、イエスを信じることによって与えられる。ヨハネは、イエスを信じることの重要性を絶えず強調している。ヨハネ 3 : 16 は、聖書の中で最も有名な箇所である。イエスを信じることによって救われるというヨハネのメッセージを要約している：

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

イエスは私たちに互いに愛し合い、仕え合うよう命じられた

イエスは僕だった。弟子たちの足を洗い、私たちにも同じようにするように言われました(ヨハネ 13:1-17)。イエスが私たちを愛されたように、私たちも互いに愛し合うようにと命じられたのです。イエスは、これが私たちが本当にイエスの弟子であることのしるしだと言われた。

「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛するように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの中に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」ヨハネ 13:14-15

「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの中に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」ヨハネ 13:34-35

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。」ヨハネ 15:12

イエスは御父との関係を通してすべてをなさった

イエスは、神が誰であるかを私たちに明らかにするために人間となられた。これはヨハネによる福音書1章18節にはっきりと書かれている：いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

このテーマは、ヨハネの福音書全体を通して何度も繰り返されている。例えば、イエスは言われた、「私を見た者はだれでも、父を見たのです」（ヨハネ14:9）。「私と父は一つです」（ヨハネ10:30）。

ヨハネは、イエスが御父との関係に絶えず焦点を当てていることを強調した。ヨハネによる福音書では、「父」という言葉が120回以上使われている。イエスは御父との愛の関係をを通してすべてをなさったのです。ヨハネによる福音書5章19節はその一例である：

イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様にを行うのです。」

イエスは御父を私たちに現すために来られた。イエスは、神の神性と性質についての最大の啓示です。イエスは御父との愛の関係の中で生きることを模範とされたので、私たちが御父との愛の関係の中で生きることができるようになる。

イエスは私たちに命を与えるために来られた

ヨハネは1章4節で、「この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。」と述べている。イエスがヨハネによる福音書10章10節で言われたように、イエスは私たちに豊かな命を与えるために来られた。ここでの「いのち」を意味するギリシャ語の「ゾエ」は、ヨハネによる福音書の中で36回も使われている。これは神の命を指している。神は聖霊を通して私たちに内在され、神が本来私たちが持つようにデザインされた人生を生きる力を与えてくださる。

ヨハネによる福音書のその他の重要な言葉：「栄光」、「ロゴス」、「聖霊」

ヨハネの福音書では、「栄光」という言葉が頻繁に繰り返される。旧約聖書では、この言葉は神だけに限られていた。「栄光」という言葉が最初に使われるのは、ヨハネの第一章である：

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」ヨハネ1:14

これは旧約聖書で、モーセの幕屋で神の臨在を現すシャカイナの栄光が見えたときに使われた言葉である。ヨハネはこの福音書で「栄光」という言葉を16回も使っている。イエスはヨハネ17章で、イエスを信じる人々がイエスの臨在の栄光を受け、イエスの中で一つとなるようにと祈られた。

「ロゴス」（「ことば」）という言葉も、ヨハネが使った興味深いキーワードだ。彼はこの言葉を使って福音書を書き始めた：

「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」ヨハネ1:1

「ロゴス」は、読者にとって意味のある方法でイエスを描写している。ヨハネの600年前、ヘラクレイトスという人が「ロゴス」という言葉を、目に見えるものの理由（背後にある目的）という意味で使っていた。ヨハネはイエスを「ロゴス」と呼んだ！万物はイエスによって、イエスのために創造されたのだ！

聖霊もまた、ヨハネの文章に頻繁に登場するテーマである。ヨハネほど聖霊について語っている福音書は他にありません。ヨハネは、バプテスマのヨハネがイエスに聖霊が下るのを見たことについて書いています。ヨハネは、イエスが聖霊によってバプテスマを授けると述べた。ヨハネは、私たちが聖霊によって生まれることができると書いています。ヨハネは、私たちの内から流れる生ける水の川についてのイエスの言葉を記録しているが、これは聖霊を指している。

イエスは死の直前、ご自分が去った後に聖霊を遣わすと約束された。イエスは、聖霊がどのように弟子たちを助け、教えるかを説明された。イエスは弟子たちに、聖霊が彼らのそばに来て、彼らを慰め、すべての真理に導くと言われた。

ヨハネによる福音書に繰り返し登場する他の言葉には、「光」、「闇」、「世界」、「証人」、「生まれ変わる（霊的）」などがある。

各章の要約

I. イエスの公の務め 1-12 章

ヨハネ 1 章

神の言葉であるイエスは人となられた。ヨハネはイエスについて証言する。アンデレ、ペテロ、ピリポ、ナタナエルがイエスに従う。

ヨハネ 2 章

イエスは水をぶどう酒に変え、神殿を清め、ユダヤ教の指導者たちの奇跡的なしるしの要求に応えられる。

ヨハネ 3 章

イエスはニコデモと話される。洗礼者ヨハネはイエスを高く評価する。

ヨハネ 4 章

イエスはサマリヤの女と生ける水について話す。イエスは弟子たちに収穫について語られる。イエスは役人の息子を癒す。

ヨハネ 5 章

イエスは安息日に人を癒し、ご自分と父との関係を述べ、ご自身に関する証しを引用し、信じることを拒んだユダヤ人たちを非難する。

ヨハネ 6 章

イエスは大勢の群衆に男の子の弁当を食べさせ、水の上を歩き、天からの生きたパンであると主張される。

ヨハネ 7 章

イエスはエルサレムの祭りに行き、神殿で教えられる。人々はイエスがキリストであるかどうか疑う。イエスはユダヤ教の指導者たちに立ち向かう。彼らはイエスを逮捕しようとしたが、衛兵たちはイエスに手をかけずに帰って行った。

ヨハネ 8 章

イエスは姦淫で捕らえられた女を助けられる。イエスはご自身の主張を受け入れないユダヤ人たちに答えられる。「わたしは世の光である。」

ヨハネ 9 章

イエスは盲人を癒し、パリサイ派の人々に尋問される。

ヨハネ 10 章

イエスは宣言される。「わたしは良い羊飼いである。」「わたしと父は一つである。」しかし、ユダヤ人たちはイエスを信じようとしない。

ヨハネ 11 章

イエスはラザロを死者の中からよみがえらせる。「わたしはよみがえりであり、いのちなのです。」とイエスは宣言された。

ヨハネ 12 章

イエス、ベタニヤのマリアから油が注がれる。イエス、エルサレム入城し、外国人の質問に答える。ユダヤ教の指導者たちは信じることを拒んだ。イエスは御父との関係について語られる。

II. 弟子たちへのイエスの教え 13-17 章

ヨハネ 13 章

イエスは弟子たちの足を洗い、そのうちの一人がイエスを裏切ることを告げ、互いに愛し合うことを命じ、ペテロが三度イエスを否定することを予言される。

ヨハネ 14 章

イエスは弟子たちに将来のことを語り、ご自分と父との関係についても語る。また弟子たちに聖霊を送ることを約束する。ご自身が愛の関係の中で生きるとはどういうことかを語る。イエスは、「わたしが道であり、真理であり、命である」と宣言される。

ヨハネ 15 章

「私はぶどうの木であり、あなたがたは枝である。私のうちにとどまりなさい。私の愛にとどまり、互いに愛し合いなさい。わたしを憎むように、世もあなたがたを憎むようになる」。

ヨハネ 16 章

「わたしは父のもとに行く。そうすれば、聖霊があなたがたのところに来られる。彼はあなたがたをすべての真理に導いてくださる。わたしが去って行くとき、あなたがたは悲しみを持つが、その悲しみは喜びに変わる。この世では悩みがあるでしょう。しかし、心せよ！わたしは世に打ち勝ったのだ。」

ヨハネ 17 章

イエスは、ご自分のため、弟子たちのため、そしてすべての信者のために祈られる。

III. イエスの逮捕、十字架刑、復活 18-20 章

ヨハネ 18 章

イエスは逮捕され、大祭司とピラトに尋問される。ペテロはイエスを三度否定する。

ヨハネ 19 章

イエスは十字架につけられ、葬られる。

ヨハネ 20 章

イエスはマリアと弟子たちとトマスに現れる。

ヨハネ 21 章

イエスはガリラヤの海辺で7人の弟子たちに現れる。イエスはペテロと和解し、ご自分の働きを続けるように励まして、「わたしの羊を養いなさい」と言われる。

ロゴス

「初めに、ことば（ロゴス）があった。」

From Boice Expository Commentary on John 1:1
ボイス聖書注解書のヨハネ一章一節

以上、ごく簡単に、イエス・キリストを「御言葉」と表現することがユダヤ人にとってどのような意味を持つかを見てきた。しかし、ヨハネの福音書を読むのはユダヤ人だけではないことを忘れてはならない。福音書はギリシア人や、ギリシア語を話し、ギリシア思想の影響を受けた人々にも読まれたのである。彼らにとって、ロゴスとはどのような意味を持つのだろうか。

ギリシャ人にとって、この疑問に対する答えは宗教ではなく哲学にある。およそ 2600 年前の紀元前 6 世紀、エペソにヘラクレイトスという哲学者が住んでいた。彼は「同じ川に二度足を踏み入れることは不可能である」と言った人物である。彼は、人生はすべて変化の中にあるということを意味していた。したがって、一度川に足を踏み入れ、足を踏み外し、二度目に足を踏み入れたとしても、二度目に足を踏み入れたときには水は流れ、別の川になっている。ヘラクレイトスにとっても、彼に続く哲学者たちにとっても、人生はすべてそのように思えた。しかし、彼らは尋ねた。「もしそうだとしたら、存在するものすべてが永遠の混沌の状態にないのはなぜか？」と。ヘラクレイトスは、私たちが目にする変化は単なるランダムな変化ではない。秩序だった変化なのだ。そしてこのことは、それを制御する神の「理性」や「言葉」が存在することを意味する。これがロゴスであり、ヨハネが福音書の冒頭で使っている言葉である。

しかし、ヘラクレイトスにとって、ロゴスはそれ以上の意味を持っていた。物質の支配原理が神のロゴスであることを発見すれば、それを歴史のあらゆる出来事や、人の心を支配する精神秩序に適用することは、彼にとってほんの小さなステップに過ぎなかった。ヘラクレイトスにとってロゴスは、この世界とすべての人間を支配する神の心にほかならない。

ヨハネが福音書を書くまでに、ヘラクレイトスの時代は 700 年近くも過去になっていた。しかし、ヘラクレイトスの思想はギリシア思想の形成に大きく貢献し、彼自身の哲学だけでなく、プラトンやソクラテス、ストア派、そしてそれを土台とした他の人々の哲学の中にも生き続けていた。今日、原子論や進化論が議論されるのと同じように、多くの人々によって議論された。ギリシャ人はロゴスのすべてを知っていた。それゆえ、ヨハネが、ユダヤ人と同様にギリシア人にとっても意味のあるこの言葉を用いたのである。

プラトンはかつて、アテネのギリシア黄金時代に彼の周りに集まっていた哲学者たちや学生たちに向かってこう言ったという。「いつの日か、神からすべての謎を解き明かし、すべてを明らかにする言葉、ロゴスが現れるかもしれない。」今、ヨハネはこう言っている。「そうだ、プラトン、そしてそのロゴスが来たのだ。今、神は私たちに完全に啓示されている。」